はしがき

21 世紀ＣＯＥプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」の研究報告書シリーズ第２集にあたる本書はロシア外交を特集した。「9.11 事件」以後、「アフガニスタン戦争」「イラク戦争」「北朝鮮核危機」と内外をめぐる情勢が激しく変化しているさなか、ロシア外交は果たしてこれにどのように対応しようとしているのか。この問いは、スラブ・ユーラシア地域の研究に携わるものだけではなく、広く国際政治に関心をよせる誰もが興味を覚えるテーマだといえるが、我が国の政治・外交研究分野における現代ロシア研究の立ち後れから、十分にフォローされているとはいいがたい。

本報告書は、我が国におけるロシア外交研究を奨励し、同時にその成果を広く知らしめるために編まれた。また報告書のタイトルが「ロシア外交の現在Ｉ」とされているのは、今回の企画が単発ものではなく、シリーズとしてロシア外交の動向を追跡していきたいとの意思表示でもある。

本報告書の冒頭には、ロシア外交をリードする政策ブレーンの一人であるバジャノフ外交アカデミー副学長と朝鮮問題研究で有名なバジャノワ研究員（東洋学研究所）の特別寄稿を伊藤庄一（筑波大学大学院）の翻訳で収録した。バジャノフ（「イラク戦争後のロシア外交」）とバジャノワ（「ロシアと朝鮮」）の２つの論文は、ロシア外交の世界との関わりを知るための格好の素材を提供している。国際的には知名度の高い彼らの主張も、日本ではそれほど知られてはいない現状を鑑みるとき、２人の議論が日本語で紹介されることは、スラブ・ユーラシア地域外の専門家たちの仕事にも大きな示唆を与えると確信する。この論文は 21 世紀ＣＯＥの活動の一環として、スラブ研究センターで 2003 年 10 月 17 日に和田春樹氏をコメンテイターとして開催された研究会で報告されたものである。

バジャノフとバジャノワの論文にそれぞれ対になるかたちで収録されたのが、クリフツォフ（「『9.11 事件』以後のロシア外交」）及び中野（「ロシアの国益と北朝鮮の核問題・体制変革」）の両論文である。前者は「9.11 事件」以後、ブッシュの対イラク・北朝鮮・イランへの敵視政策が強まるなか、ロシアがこの３国にどのような姿勢をとり続けてきたかを丹念にフォローした労作であり、後者はバジャノワ論文と同じく、北朝鮮問題へのロシアのスタンスを読み解く手がかりを与えてくれる。なお、中野論文は日本国際政治学会部会「朝鮮半島安全保障の国際関係」（2003 年 10 月 19 日：つくば国際会議場）での、クリフツォフ論文は 21 世紀ＣＯＥ企画のロシア外交研究会（2004 年 2 月 1 日：スラブ研究センター）での、それぞれの報告原稿をもとに加筆・修正されたものである。

さて「イラク戦争」や「北朝鮮核危機」の陰に隠れた感が強いが、ロシアの対アジア外交を展望するとき、欠かすことができないものが、対中国、対インドとの関係であろう。伊藤論文（「プーチン時代の中露関係」）はハバロフスクに３年間専門調査員として滞在した強みを生かし、近年のロシアと中国の関係の微妙な変化をその圧倒的な情報量をもって

描こうとする。対照的に、吉田論文（「インドと旧ソ連・ロシア」）はインド側からみたロシアとインドの関係を冷戦期に遡って歴史的に追跡し、プーチン時代の両国関係の変化と連続性を描き出す。２つの論文をあわせ読むことで、ともすれば、日本中心的なバイアスで「誤読」しかねないロシアの対アジア外交（要するに、ロシア外交における日本の意味の過大評価）を、読者が冷静に再考するきっかけとなれば、幸いである。

なお、本報告書は、科学研究費基盤研究（Ｂ）「ポスト冷戦時代のロシア・中国関係とそのアジア諸地域への影響」の成果でもあり、執筆者の多くはその研究分担者もしくは協力者である。報告書の原稿及び訳文などの点検については、スラブ研究センターの毛利公美研究員及びＣＯＥワーキング・ルームの方々のお手を煩わせたが、もとより、これは執筆者の責任を免ずるものではない。

2004 年 3 月 5 日

北海道スラブ研究センター
岩下明裕